

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- がんばる笑顔を応援しよう！ ……1
- ネパール現地調査報告 ……2~3
- 始まりました！牛銀行 ……4
- モン族の伝統の手仕事 ……4
- カンボジアの洪水被害 ……5
- ベトナムに原発輸出?! ……5
- 東アジアの子どもたちと考える「平和」 ……6
- 新理事紹介 ……6
- 南奔北走「たうんチーム」 ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8



がんばる笑顔を 応援しよう！



事務局長 筒井由紀子

経済発展の「負の影響」

新しいビルやショッピングモールの建設ラッシュ、スマートフォンを使いこなし、おしゃれな流行りの服に身を包む若者たち。アジアの国々は、目覚ましい経済発展を遂げています。しかし、その経済発展には「負の影響」もあります。「これまでずっと、よその田んぼを使わせてもらってやってきた。それが突然ただでは貸せないとわれ、どうすることもできなくなった」。カンボジアのタケオ州のアン村で村人から聞いた話です。ラオスの支援地サワナケート県の村でも、「換金作物をつくらないか」と持ちかける詐欺など、お金をめぐるトラブルが起こっているそうです。タケノコや木の実などを採りに入っていた山がある日突然、外国資本のものとなり、村人が自由に出入りできなくなるということもあります。経済発展を支える「お金がものを言う社会」が農村にまで浸透し、先祖代々、村の資源を利用し、持続可能な形で皆で助け合ってきた村の「分かち合う暮らし」が変わってきているのです。ネパールの新しい支援対象村カルパチョーク村では、温暖化による気候変動の影響を受け、水源が枯渇し、農業はおろか、飲料水も不足しているところがあるそうです。農業ができない人々はマレーシアや中国、中東などへ出稼ぎに行かなければなりません。これも経済発展の「負の影響」と言えるでしょう。経済が何より優先される社会で、私たちは大切な何かを失っているのではないのでしょうか。ふり返って考えると、日本でも経済優先の政策がどんどん進められ、持続可能で、弱者にとってもやさしい社会とは反対の方向へ向かっていくような気がします。



グローバルフェスタでがんばる笑顔キャンペーンを説明する

「いいね！」シールで応援を

地球の木では、この秋「がんばる笑顔を応援しよう！キャンペーン」をおこなっています。10月からの国際協力のイベントや地域のおまつりのブースでは、アジアの地図を見せながら、通りかかるお客さんに呼びかけ、支援プログラムの話をして、それぞれが「がんばっている」と思った人たちの住むところに「いいね！」シールを貼ってもらっています。カンボジアで伝統的な織物を学びながら、学校を続け、家計を助ける少女たち。ネパールで収入創出プログラムに参加し、水不足と害虫に悩まされながらもおいしい野菜を作っている女性。そして、気仙沼の仮設住宅でふさぎ込みがちになるお年寄りを元気づける若者たち。たくさんさんの「いいね！」シールが地図の上に並びました。

「いいね！」と共感し応援してくださる皆さんのメッセージは、写真と一緒に支援地の人たちに届ける予定です。彼らの状況を知り、その「がんばり」に共感し、支援をする私たちのメッセージは、支援地の人たちを何より元気づけることでしよう。

今年も「がんばる笑顔を応援しよう！キャンペーン」の年末募金が始まりました。（同封の年末募金キャンペーンチラシをご覧ください）皆さまの温かいご支援を何とぞよろしくお願い致します。





ネパールは2008年に民主共和国になったものの、新しい国家づくりが難航しています。昨年5月、憲法を制定しないまま制憲議会が解散し、まもなく選挙が予定されています。今回の調査では、カルパチョーク村と、マンガルトール村のタクレ地区を視察しました。特に印象的だったのは、出稼ぎが想像以上に多く、その影響が広範囲に及んでいることでした。

カルパチョーク村を訪ねて

協同組合の女性たちと

昨年度からマンガルトール村の西隣カルパチョーク村でも「幸せ分かち合いムーブメント」が始まりました。この村は人口2,061人。マンガルトール村（人口約4,800人）の半分弱の規模の村です。少数民族、特にタマン族が69%を占め、標高1,000mから1,500m位の山あり谷ありの地形の中に集落があちこちに散らばっています。行く道には実をつけた多種の木々が見られました。ジャックフルーツ、釈迦頭、ざくろ、数珠に使う実など。ガイドを務めてくれたランジットくんによると昔は薬草をよく使っていたとのこと。腹痛に効く草や咳止め、下血を止める草の根などを紹介してくれました。

村の人たちとの集会

村とSAGUN（パートナーNGO）を結ぶ調整委員会の人たち、高校生地区連絡員、収入創出プログラムの農家の人たちに集まってもらい、カルパチョーク村について教えてもらいました。

村のよいところは、車道が建設中で幹線道路とつながるので、農業に将来性がある、さまざまな薬草がある、ユースクラブや女性の協同組合など、地域社会に奉仕するグループがあり、村人の団結力がある、自然が豊かで少数民族の文化が残っている、などがあげられました。

仕事は多い順に、農業、海外への出稼ぎ、「タンカ」と呼ばれる仏画の絵師。水不足で、山の斜面で営む農業では1年分の家族の食料を供給できなく、生活していくのに精一杯。よって教育への関心はこれまで低かったそうです。教育がないのでよい仕事につけず、町や海外に出稼ぎに行き、肉体労働をする人が多いという分析でした。気候変動と環境破壊により水源が枯渇しているという点は最大の課題です。乾期になると灌漑はおろか、飲料水も不足する傾向にあるため、森林と自然環境の保護が必要とされています。

海外へ出稼ぎに出る若者たち

収入創出プログラムに参加しているギャンドージさんのお宅を訪問しました。家には奥さんと孫がふたり。息子はドバイ、嫁はマレーシア、そして娘はイランで働いているとのことでした。カルパチョーク村のユースクラブも主要メンバーが海外に出てしまったため、活動が滞っていました。例年協力していた小学校のお祭りにはマレーシア組が海外から資金援助をしているということです。

外国へのネパール人移住労働者

ネパールでは1998年度までは新規出稼ぎ労働者の数は1万人を下回っていましたが、その後中東諸国やマレーシアなどへの出稼ぎが急増し、2011年度には38.4万人となりました。神奈川県の出身国を見てみますと、2011・2012年度にはネパールからの留学生が第5位に入っていました。

海外からの送金のGDP比率は23.8%（2012年度アジア開発銀行統計）と南アジア諸国の中でも突出しています。経済構造が出稼ぎ労働者からの送金に依存していることがわかります。いっぽう、昨年度726人のネパール人海外移住労働者が東アジアと中東諸国で死亡しているという報道がありました。主な死因は心臓系の病気、次に交通事故と自殺、仕事場での事故が続きます。厳しい労働環境や文化の違いによる不適応が原因していると想像されます。



収入創出プログラム参加の女性たち

笑顔でがんばる人たち

そのような状況の中、「幸せ分かち合いムーブメント」を通じて地域をよりよい場所にしようがんばっている人たちに会いました。

生活向上に励む農民たち

今年2月にカルパチョーク村でも8人の収入創出プログラム参加者が決まり、3月に各自5,000ルピーの融資を受け、活動が始まりました。トマト、トウガラシ、豆類などを植え、8月の時点までの収入は400~6,000ルピーと差がありましたが、それぞれ、研修を受けながら意欲的に取り組んでいます。4、5年前までは自家用野菜栽培が主で、収入を得るための野菜栽培のノウハウは少ないとのことでした。種や道具などの購入資金は借金をしなければならないので、無利子で融資を受けることができるこのプログラムは好評でした。水不足が深刻な地域は今回は参加していません。

協同組合の女性たち

村人がお金を毎月積み立て、助け合い、自立した運営をする「協同組合」が農村の発展において期待されています。昨年度から他村の協同組合との経験交流を実施しています。

3年前に設立されたチョルワ女性協同組合のみなさんと意見交換をしました。25人から始まったこの組合は現在会員約200名。チョルワとは「めざめ」という意味です。「女性たちが変わらなければ、家族の幸せは望めない」という理念に基づき、女性たちが力をつけ、女性の権利についての意識を高めることを目的にしています。主な活動は、ミルクを売るための水牛の購入や小さな店を始めるためなどの資金の貸付。中東やマレーシアへ出稼ぎに行くための融資の例もあるそうです。また、高校修了試験合格者を祝う会を開いて教育への関心を高める活動も重要な活動のひとつです。

女性の中には識字者が少ないので、村の高校の卒業生が働く場となることが期待されます。現在は村出身で町に住む人が中心となっていますが、運営を地元の人たちで行うことが、より自立した運営と組合員の理解につながると感じました。

タクレ地区の子どもたち

マンガルタル村のタクレ地区も訪問しました。よく訪れているピンタリ地区やラジャバス地区とは谷を越えた山の峰にあります。今後この地区を重点地区のひとつとしていく計画です。この地区にあるシュリ・マハカリデピ小学



協同組合の経理スタッフ



サルバジットさんは子どもたちの心をつかむのが得意

校では、第2期奨学生のカンチマヤさんが低学年の先生をしています。50人位の子どもたちが校庭に集まって来ました。SAGUNコーディネーターのサルバジットさんは笑顔とジョークを交えた絶妙なやりとりで子どもたちを惹きつけた後、子どもたちに国歌を歌ってもらいました。

子どもの本のプレゼントを持って行き、学校に寄付しました。ネパール語のお話や歌などの絵本、英語で書かれたやさしい絵本などです。子どもたちに手に取って見てもらおうと、全員に配りました。すると、思いもかけない光景が始まりました。子どもたちが本に指を当てたりして、それぞれ声を出して読み始めたのです。本への興味がとても強いことがわかりました。保護者からも「このような子ども向けの本がほしかったのよ！」と感謝されました。きちんと図書管理をして教育の向上に役立ててほしいと願っています。
(ネパールチーム 丸谷 士都子)



目を輝かせて本を読む小学生

今年度の幸せ分かち合いムーブメントの活動

<教育>

奨学金・校外研修・作文コンテスト・教師トレーニング
図書室の充実・小学校教師サポート

<生活改善>

収入創出・協同組合キャンペーン・技術トレーニング(マットづくり)・植林

<ムーブメント推進>

ニュースレター・幸せ分かち合いワークショップ・ロシ地区のともだちとハガキの交換

「幸せ分かち合いムーブメント」はマンガルタルともだち募金、かながわ国際協力基金、アジア生協協力基金のサポートを受けています。

始まりました！牛銀行



ラオスの10月。稲収穫前の食糧不足で苦しい時期を乗り越え、ようやく恵みの季節になりました。今年の収穫量はどの村も「まあまあ」だそうで、村人もひと安心。水害や害虫により収穫量が減ると生活は一変してしまうため、JVCスタッフも胸をなで下ろす気分です。

いよいよ新しく牛銀行の活動を開始しました。村人にとって家畜は大きな資産です。家畜を何頭も飼い、売ることによって利益を得ている比較的裕福な家族もいますが、ほんの数頭を持ち、病気や災害など予期せぬ出費や食糧不足の際に、家畜を売り払うことで借金を避ける、まさにリスク回避のために家畜を持つ村人も多くいます。JVCの牛銀行活動では、そういったセーフティー・ネットを必要とする家族を中心に活動を始めることにしました。

牛銀行の仕組みは、まず、村の中で牛銀行から牛（雌）を借りることができる家族が4世帯選定され、雌牛を借ります。通常1年以内で妊娠が期待されるため、仔牛が生まれたら、雌牛を銀行へ戻し、産まれた仔牛は自分のものとなる、というのが1サイクルです。雌牛はまた、次の4家族へ回り、新たに仔牛が産まれれば、また次の家族に雌牛が渡される、という仕組みのコミュニティ銀行です。村人は、雌牛を借りる時にいくらかお金を支払うため、そのお金の貯蓄で牛銀行委員会は新しい牛の購入、ワクチンの投与など、運営をしていきます。今回は8月に、ピン郡のパルー村で試験的に開始しました。

ラオスの村では、放牧的飼育が慣習的になっており、栄養のあるエサをやる、ワクチンで病気を防ぐ、というように家畜を健康に育てる意識が低いことが問題としてよく指摘されます。この牛銀行の運営を継続していくためには、牛が健康に管理されることが必須条件となり、“健康に飼育する”という意識をどこまで村人に理解してもらおうか、というのが活動の鍵になるでしょう。（JVCラオス現地事務所 林 真理子）

モン族の伝統の手仕事

悲劇の民族

地球の木のフェアトレード「幸せ分かち合いクラフト」では、エッセイストでモン文化研究家の安井清子さんが支援しているラオスの少数民族、モン族の村で作られている刺繍製品を販売している。カラフルなデザインと緻密な手刺繍の品々には心引きつけられるものがある。元々モン族は中国に住んでいたと言われている。文字を持たないモン族の歴史にははっきりとした記録がなく「・・・と言われている」という表現でしかわからないことも多い。中国の清朝の民族同化政策のために、逃げてきた人々がインドシナ半島の中国国境沿いに住むようになったそうだ。その後、ベトナム戦争、内戦でも多くの人々が難民となり、今でもラオスでの地位は低く、厳しい生活を強いられている人も多い。定住の地を持たず、他民族に追われ、戦火に巻き込まれ、安住の地を求めて移動を繰り返してきた悲劇の民族と言われる所以だ。

ちゃん切られた民族衣装の袖

7月、ラオスを訪問したとき、「タラートサオ」（ビエンチャンで一番大きな市場）のモン族の衣装を売っている店に行ったときのことである。モン族の民族衣装は、自家製の麻や綿に伝統的な染め（藍染め）を施し、手刺繍や色とりどりのテープ（コード）で飾り付けたはなやかなもので、女性たちが心を込めて作る手仕事の集大成だ。ところがその店で売られていたのは、化繊のヒラヒラした安っぽい布地に大量生産した飾りを縫い付けた衣装や帽子ばかり。インターネットでは「モン族の衣装のユニーク口化？」とその様子を紹介しているニュースサイトを見つけた。このような店で買い付け、山奥のモン族の村へ移動販売していることもあるという。一方、店内には、古い民族衣装の袖を「ちゃん切ったもの」が山積みになっている売り場があって、その袖がふたつで1ドルにも満たない値段で売られている。モン族の民族衣装は袖の部分や胸元、スカートの裾に手の込んだ装飾が施されていて、状態の良い完全な布は、アンティークとして高価で取引されている。その装飾はバッグや小物の飾りとしても人気が高いので、切り刻んで、加工され外国人向けのお土産として売られているのだ。前出の安井さんに聞いたところ、当のモン族の人たちには、少し安っぽくても新しくキラキラした衣装が人気で、多くがそれを着ようになっているそうだ。古い民族衣装は、二束三文でとっくの昔に売ってしまったそうである。

伝えたいアジアの心

自分の身をふり返ってみると、子どもの頃、祖母がせっせと編んでくれたセーターではなく流行りの既製品のセーターを欲しがった。

モン族の手工芸品は、困難な状況にある人たちの生活を支える重要な手段でもあるので、その伝統的なデザインやテイストは、若いモン族の人たちにも受け継がれて、これからも続いていくのだろう。しかし「売るために作るもの」と「子どもや孫のために作るもの」は同じはずがない。地球の木の「幸せ分かち合いクラフト」が大事にしているテーマは、「母から娘へ、伝えたいアジアの心」。ラオスのモン族だけの話ではない。大切な何か失われていく。（クメールシルクチーム 筒井 由紀子）



大量生産された民族衣装

カンボジアの洪水被害



9月中旬以降、カンボジアでは全国的に大規模な洪水が起こっており、168人もの犠牲者がでました。水田やその他の農地の大規模な破壊、また国道や村道の損壊など、影響は180万人に及ぶという。被害があったのは、カンボジアの北地域の州、バンテアイメンチエ州、シエムリアップ州、バタンバン州、パイルン州、ラッタナックキリ州など（カンボジア政府災害管理全国委員会報告）。

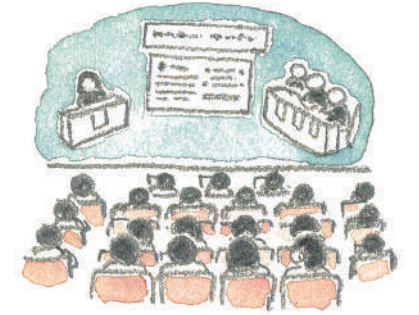
地球の木の支援地タケオ州への影響は少なく、アン村では洪水は起こっていません。村では、例年通りにみなぎ伝統的な織物をやっています。男性は牛の餌（草）を刈ったり、魚などを捕ったりし、女性は家で炊事をしてシルクを織ったりします。男性は女性の仕事（織物）も手伝います。例えば、糸を染めることとか、織ることとか。もうすぐ収穫の季節になるので、みんなが一懸命仕事してお金を貯金しています。アン村は織物に頼る生活をしているので、収穫の時期は織物ができなくて現金収入がなくなるからです。

（ボランティア連絡員 チャン・ディナー）



作業所にて聞き取りをするディナーさん（中央）

ベトナムに原発輸出？！



福島第一原発のタンクから汚染水が漏れ続けている。その対処法もわからない中で、日本政府は原発を輸出しようという動きを積極的に進めている。「そんな原発を本当に買う国があるの？」「これだけの事故があり、処理もままならない国がそれを売ろうとしているの？」こんな素朴な疑問を持って、9月7日、国際環境NGOメコン・ウオッチ他主催のシンポジウム“ここがマズイ、原発輸出=ベトナム編”を聞きに行ってきました。6人の講師のうち、4人はベトナムの専門家です。

事故の教訓？

ベトナムでは経済成長に伴い、電力需要量の急激な増加が見込まれるとして、数年前からロシア、日本と原発輸入の交渉を行っている。原発事故後も計画の変更はない。「日本は福島の事故を教訓にして、絶対安全な原発を輸出してくれる（旧ソ連のチェルノブイリ然り）」と言う首相のもと、ベトナム国民には政府に都合のいい情報しか届かず、原発の怖さは知らされていないようだ。そこに売るのは、一般市民でも情報が得られるような国に売るとも罪深いのではないだろうか。また汚職・腐敗が多くあり、手抜き工事、管理が心配される自国に原発を入れることに危険を感じているベトナムの一部の有識者から、日本のNGOに対して、輸出に反対してほしいという要望も届いているという。

社会的構図

補償金をあてにしなければやっていけない過疎の地に、離れた大都会に電力を供給するための原子力発電所を造る。この差別構造は日本と同じだ。また現在、日本では電力を過剰に供給し、過剰に消費して、電気が無い暮らしは考えられなくなっている。「原発輸出は、結果的にそのような、差別構造、ライフスタイルまでも輸出することになる」と言う。

輸出どころではない

国内では新規建設が見込めないで原発技術維持のためとも、カネのためとも言われている原発輸出なのだが、事故の収束に最大限の力を注がなければならない今、輸出どころではない。現在、原発再稼働に反対している日本人は多い。しかしどれだけの人が、原発輸出について知っているだろうか？多数の国民が脱原発を望んでいるながら、他国に輸出するという日本政府。考えさせられるシンポジウムでした。

（会報作成チーム 浜辺 美英子）

第13回南北コリアと日本のともだち展 東アジアの子どもたちと考える「平和」



真剣な表情で読み聞かせを聞く平壤の子どもたち（平壤市ルンラ小学校）
林典子氏撮影

羽田空港に向かうモノレールの中で、向かいの席に座った女性に「どちらまで？」と声をかけられた。「中国です」と答えると、「あら、こちらは大変でしょう。日本人が行くと」との反応。私が出かける先では見知った人たちが迎えてくれて忘れがちになるが、東アジアの国を日本人として訪れると、厳しい視線を向けられざるをえないような状況が確かに続いている。日本国内でも「北朝鮮」どころかブームと騒がれた「韓国」さえ、やり玉にあげられる昨今だ。

朝鮮半島と日本を絵とメッセージで繋いできた「南北コリアと日本のともだち展」は今年、子どもたちと平和について考え、互いの思いに耳を傾けるという、この「大変な状況下」ではずいぶん大胆な企画をもって各地域に出かけた。鍵になるのは、絵本作家・浜田桂子さんの描かれた『へいわってどんなこと？』。日・韓・中の絵本作家12名が議論を重ねて企画、出版された＜平和絵本＞シリーズの一冊であるこの本は、戦争、爆弾といった非平和の象徴を否定するだけでなく、ぐっすり眠れる、思いっきり遊べるといった日常をとりあげ、子どもたちが「これも平和なの？」「それなら私は、こんなことも平和じゃないかなと思う！」と話せるきっかけの種がいっぱい。この本を持って8月は日本に住む朝鮮学校や日本の子どもたちと平壤へ、9月は約50名の子どもたちが集ったソウル、そして中国吉林省に位置し朝鮮族も多く暮らす延吉と駆け足

で巡ってきた。平壤とソウルには、浜田さんにも同行していただいた。

浜田さんの色鮮やかな絵本を手にとりながら、何度も熱心にページを繰る延吉の子どもたち、浜田さんの語りにも真剣なまなざしを向ける平壤の子どもたち、長い感想文を懸命に綴ってくれたソウルの子どもたち。

わたしはともだちとケンカすることが多いです。これからはケンカしないでながよくすごしたいです。
(平壤/小2)

私は平和をひとことで「幸せのもと」だと言いたい。「平和」があれば、自然に幸せになるからだ。
(ソウル/小4)

平和って、おがあさんが弟とぼくを生んで下さったこと。生んで下さって本当によかったなと思います。平和は、ぼくと弟が、やさしいこどもになることだと感じました。
(延吉/小2)

絵本の最後には、誰もが一つしか持っていない「いのち」、それを尊重しあうことの大切さが描かれる。「よい朝鮮人も悪い朝鮮人もどっちも殺せ」といった衝撃的な主張までも「表現の自由」としてまかり通らせてしまった日本の空気の中かで、それよりも、いのちを輝かせることの大切さを発信し、東アジアの友人に伝え続けることこそ、ともだち展の役割と信じながら、絵とメッセージ、写真を一人でも多くの人に見てもらえるよう展示会の準備をすすめている。
(南北コリアと日本のともだち展実行委員会事務局 寺西 澄子)



できあがった「みんなでおパレード！」の作品たち。背景にあるのが、パレードの中心となるドラゴンの山車。(韓国での東アジアこども平和ワークショップ)

地球の木に新しい風を～ 新理事紹介

今年度から地球の木に新しく3人の理事が加わりました。皆さんから抱負を一言お聞きしました。

磯野晶子さん

私のライフワークの開発教育を通して地球の木に出会い、会員になりました。地球の木が力を入れている教材開発、出前事業、ネパール支援等に興味があります。開発教育、ネパール支援、フェアトレードなどに関して何か貢献できたら嬉しいです。



成瀬悦子さん

地球の木の活動に共感して会員になりました。会員の皆さんが「応援したい！自分も活動したい！」とっていただくためには何が必要かを、考えていきたいと思ひます。



古田麻里子さん

地球の木の理事という形で直接関われることでワクワクしています。歴史のある地球の木ですが、時代の流れと共に常に変化し続けているのが伝わるように私のカンボジア支援経験など活かせればうれしいです。全会員の皆さんにお会いできたらと思っています。






南奔北走「たうんチーム」

～自分たちの住む地域で～

それまでのブランチ(地域)の枠を取り払い、より活発な地域活動をめざし「たうんチーム」が生まれて1年余。チームメンバーに活動のレポートを寄せてもらいました。

「暮らし」や「生活者」、これは地球の木でよく使われる言葉です。「たうんチーム」は、その言葉のように自分たちの住む地域の生活者として「暮らし」とも関連させ、地球の木の活動を伝える役割があります。その場は、各地域のイベントで、地球の木のクラフトの販売なども行います。とはいえ、地球の木など何も知らない人に話を聞いてもらうのはメッチャ難しい。

ということで始めたのが「ツールづくり」です。まずは呼び止めるきっかけにと、クラフトにも関係のある「シルククイズ」。たとえば、「^{*1}ひとつの蚕から何メートルの糸がとれるでしょうか？(1m、50m、1km)」といったものです。さらに進めて、ミニワークショップ的に使えるよう、支援地ラオス、カンボジア、ネパールを題材に「ぶつとびアジアクイズ」。これは以前作ったクイズのリユース版で、「^{*2}ネパールの花嫁さんの着る衣装は何色？(赤、白、ピンク)」といったものです。また視覚的にもアピールしようと、各支援地のポスターを作ることにしました。これは各支援チームと共同で「たうんチーム」としては一石三鳥をねらいました。地球の木の持てる能力を結集していいものを作る 支援地の最新情報を知る 他チームとの共同は楽しい。

また「暮らし」と大いに関係のある「TPP」学習会を行いました。テキストには「TPP何が問題？暮らしはどう変わる？」(アジア太平洋資料センター版)と朝日新聞の記事などを使いました。しかし学習会は消化不良かつ下痢気味に終了しました。いまいち切実に感じられないということでしょうか。TPPの内容は広範囲に亘りますが、めざすところはアメリカ型の自由市場経済を徹底させるということでしょう。その結果「我利我利社会」を更に進めることとなります。格差がますます拡大するアメリカの問題点を、J・スティングリッツは「世界の99%を貧困にする経済」で事細かに説明しています。



JICAギャラリーで光っていた？地球の木の活動紹介パネル

そして日本もアメリカも年々GDP(国内総生産)は上がってきたのに、国民の幸福度は逆に下がっているのが現実です。私たち先進過剰国の住民は、豊かさに対し貧困です。ですから、何が成長なのか、ということも問い直す必要があると思います。

*1 答え：1km *2 答え：赤



フォーラム・アソシエ文化祭で。クイズ正解者にプレゼントした“おひさまケーキ”は大人気。

会員のみなさん、もう一歩前へ!

会費を払って、そして会報を読んで下さっている会員のみなさん、もう1歩踏み出して、何かをご一緒しませんか？私たちは仲間です！たとえば、近場のイベントの手伝いに出かける/会報の発送を手伝う/関内駅前の事務所をのぞいてみる/興味のある勉強会に参加してみる/スタディツアーに参加する/生活クラブデポーでの展示会に立ち寄ってみる、などなど。きっと世界が広がります。まずはどうぞお気軽にお問合せ下さい。(たうんチーム 米林 大作)

活動日誌(9月~11月抜粋)

- | | | | |
|----------|--|---------|---|
| 9月2日 | ラオス現地スタッフ帰国報告会 | 31日 | 中間監査 |
| 10日 | 東日本復興支援まつり事前交流会(オルタ館) | 31~11/1 | 大黒まつり出店(孝道山) |
| 10~10/27 | ASEAN友好40周年記念「東南アジアとあゆむ未来」にパネル展示(JICA横浜) | 11月 | |
| 19~20日 | デポー展示会(緑園デポー) | 2~3日 | 国内スタディツアー(山梨・長野県) |
| 20日 | 第3回理事会 | 4日 | Korea X Japan かながわユースフェスタ2013にて「南北コリアと日本のともだち展」展示(山下公園) |
| 28日 | フォーラム・アソシエ文化祭参加(オルタ館) | 9日 | 東日本復興支援まつり(山下公園) |
| 28日 | ネパール調査報告会(平沼記念レストハウス) | 10日 | カックーフエスタ'13参加(大和市市民活動センター) |
| 29日 | ひらつか活動支援センターまつり参加 | 16日 | オルタ館フェスタ出展(オルタ館) |
| 10月 | | 17日 | 第1回かながわ「共に生きる」学習会(横浜中央YMCA) |
| 5~6日 | グローバルフェスタJAPAN2013参加(日比谷公園) | 18日 | 第4回理事会 |
| 7日 | 出前講座「未来の食卓」(船橋マイスター学院) | 22~23日 | デポー展示会(霧ヶ丘デポー) |
| 14日 | いそご国際交流フェスタ「デプラニものがたり」 | 25日 | デポー展示会(らいふたうんデポー) |
| 19日 | よこはま国際フェスタ2013出展(象の鼻パーク) | 30日 | デポー展示会(東寺尾デポー) |
| 29日 | 「いのり題目」出展(妙法寺) | | ネパールスタディツアー説明会 |

地球の木カレンダーの購入へご協力ください！



2014地球の木カレンダーは「心のお陽さま」です。お友だちやお世話になった方へのプレゼントにも最適です。メッセージカードを付けて地球の木よりお届けします。

写真：安田 菜津紀

サイズ：28×38.5cm（使用時58×38.5cm）

製作元：日本国際ボランティアセンター

価格：1,500円



ネパールスタディツアー2014説明会

スタディツアーってなにをするの？わたしでも参加できるかしら？そんな質問にお答えします。ご予約ください。

【説明会】

■日 時：12月8日(日) 11:00～12:00 地球の木事務所

ネパールスタディツアー2014

■日 時：2014年2月11日(火・祝)～2月19日(水)
東京発着 8泊9日(機内1泊)

■訪問地：カトマンズ、カブレ郡ドゥリケル・カルパチ
ヨーク村・マンガルタル村、ナガルコット

※詳細は、地球の木ホームページをご覧ください。

かながわ「共に生きる」学習会

神奈川に住む外国籍の人たちと「共に生きる」ことについて、たくさんの市民と一緒に考えていくための講座です。

第2回 「神奈川の多文化共生の歴史とこれから」

■日 時：1月26日(日) 14:00～16:00

■場 所：横浜中央YMCA

■講 師：木下理仁氏(かながわ開発教育センター事務局長)

第3回 「近現代史から学ぶ～在日はじめて物語」

■日 時：2月8日(土) 14:00～16:00

■場 所：横浜中央YMCA

■講 師：李柄輝氏(朝鮮大学校 准教授)

地球の木講座 「アーサー・ビナードさんが語る」

■日 時：1月31日(金) 18:30～20:40

■場 所：開港記念会館

(みなとみらい線「日本大通り」下車1分)

ずっと以前から原発や憲法について意欲的に発信しているビナードさん。私たちの社会や暮らしを少しでもよくしていくための考え方や活動の力をもらいます。

※詳しくは、同封のチラシをお読みください。

よこはま国際フォーラム2014

神奈川県内を拠点に活動しているNGO、NPOや学校、国際機関など約40団体が、一堂に会して国際協力・国際交流のセミナー、ワークショップを実施します。

地球の木はワークショップ「未来の食卓」～お米が食べられなくなる日が来る?!～で参加します。

皆様、どうぞご参加ください。

■日 時：2月9日(日) 11:00～12:50

■場 所：JICA横浜

■主催：YNN(横浜NGO連絡会議)



「ラオス森の絵本」制作にむけて 田島征三さんのこのごろ

念願叶って、ついに「瀬戸内国際芸術祭」に行ってきました。10月27日は田島征三さんが、この芸術祭に作品「あおぞら水族館」を出展している大島(国立ハンセン病療養所大島青松園がある)で「あおぞら市」というイベントがあり、田島さんのライブペイントと「ロバの音楽座」のコンサートとのコラボも行われるということで、楽しみにしていました。会場に入ると既にほぼ満席。今回は入所者の方の川柳を絵に表すというもの！川柳の作者である4人の入所者の方々も、舞台上で恥らいながらも嬉しそう。コンサートの間、田島さんは行ったり来たりしてずっと描いています。演奏が終わり、絵も何とか完成です。「すみません、みなさんの川柳の絵ではなくて、自分の絵になっちゃいました！」と(笑)。この日の海と青空のように穏やかでやさしさに満ちた時間を過ごすことができました。

(ラオスの絵本実行委員会 武安 ますみ)

第13回南北コリアと日本のともだち展

日本、韓国、北朝鮮、中国、在日コリアンの子どもたちが描いた絵「わたしのねがい」を展示します。また、絵本「へいわってどんなこと？」(浜田桂子著)の一場面が会場に登場。東アジアのなかまたちと一緒に、みんなで「パレード」しよう！

■場 所：青山こどもの城 1Fアトリウム

■絵画展示：2月20日(木)～23日(日)

■ともだちセミナー：2月22日(土) 18:30～20:30
研修室

■ギャラリートーク：2月22日(土)、23日(日)
14:00～15:00 絵画展会場にて



カラーに変わった会報いかがですか？目先の変化だけでなく、マンネリにならないよう内容の充実も図らねばと、編集委員はみな息切れしつつも頑張っているつもり。空回りにならないよう注意して、さあ次号の企画をひねり出さねば。(Y. N)

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市個人住民税からも控除となります。

★ボランティア募集！発送作業、イベント手伝いなど